友諒

－第五号－

（題字　石田喜助先生）

井上和夫先生の御逝去を悼む

友諒会会長　高　橋　　伸

井上和夫先生が昭和55年８月27日に亡くなられました。謹しんで哀悼の意を表し本号を発刊いたします。

先生は略歴にもみられるように、昭和20年からずっと本学で教鞭をとられ、本学の卒業生であることも手伝って、*Crown Prince* として育ってきました。工学部長になられ、今後は大学全体をみていただこうと期待してましたのに、不幸にも病魔のおかす所となり、呆然たる我々を残したまゝ不帰の客になられました。惜みても余りあります。今更とは思いますが、彼が健在なら、こうもしたろう、あれもやってくれただろうと残念です。

ある時、航空学科の製図室で、米沢からきた、おそろしく頭のいい二人の話を聞きました。井上と酒井です。隅で数人で何か専門的な議論をやっており、その中で童顔、ほほを赤らめながら、せきこむように話している――仲間を納得させようと懸命になっている――男、それが井上でした。私は孔子の弟子たちを思いました。所が弟子じゃなくて、井上のあだなは聖人でした。

東北大工の19年組は教師として東北大は勿論、方々で活躍（航空では、泉、酒井、小林、戸部と井上）、井上は大器の一人でした。私が流浪のはて、昭和27年に工学部に拾ってもらった時は、井上はもう有名な研究者でその教育熱心な所は全学に知れわたってました。それ以来、井上のかげを歩きながら今日に到ってます。

彼にとって、よかったことなのか、どうか、私には解りませんが、彼には使命感がありました。（過去形でかくのが、こんなに早いとは知りませんでした。）学校をよくする、学校のため、といったたぐいの話はよく聞かされました。ドン、キホーテにも崇高な使命があったとか、〃きのこ〃になったな、と冷かすと、彼はにが笑いしたり、むきになってくってかかったりしました。その純粋さには理窟抜きに頭が下ります。そして気をとりなおして説得にかかるときの彼は製図室での昔の彼とそっくりでした。〃きのこ〃とは二人の間でしか通じないが、要は〃正義を行うなら、ひどい苦労を覚悟せよ〃といったような意味です。

航空学科で彼の製図をコピーして以来、いつも彼を盾にして、のんびりやってきました。今、直接風あたりをうけて途方にくれてます。個人的なことはともかく、学校として、機械精密や短大として、その損失は計り知れないものがあります。井上のやり残したことを代って成しとげる人物が学校にいないから。

あらためて井上先生の死が惜しまれてなりません。

「学生の書き賃」と先生

植　松　整　三

昭和37年４月に私は先生の助手となった。その年、Ｓ科は発足２年目で教授は先生１名、助手は私１人であった。その後、年毎に科教官は増加したが、Ｓ科第一期生が卒業するまでの学生のコンパのときには、精密工学科と言うより井上工学科の感があった。第一期生が２年の頃のコンパに、先生は学生にせがまれ、緊張した面持で〝やしの実〟を歌われた。しかし、その後先生の歌とおどりは回を追うて上達し、精密音頭を披露するようになった。

私は37年に先生の機構学の中の歯車の部分を聴講させられた。これは内容もよく判らなかったがＩＮＶの発音がどうにも不可解で、先生に質問しても明解でなかった。

私が、初めて学会講演したのは、仙台でだった。その晩、共済会館に宿をとり、その食堂で先生からお酒をご馳走になった。私は自分の研究の一区切りとして大変うれしかったのであろうが、先生の喜びはたとえようがなく大きく、私ももっと喜びを表わさなくてはいけないのかと先生にひきられながら、むしろ緊張していたことを記憶している。

先生は研究室にお伺いしても、自宅にお伺いしても言葉少ない方であったが、学会で仙台に行くと不思議なくらい話がはづんだ。学会の懇親会の行き帰りは何故か夜道を歩くのが常だった。散歩の為に歩くのだから方向はないとしても、夜も遅くなってから東一番町を北から南にかけて藤崎デパートあたりまで進み、方向を転換して宿にもどった。この時の話は、先生が学校の将来について考えていらっしゃることが常で、私は応答のすべがなかった。

先生は機構学の講義に、丹羽重光先生の本をこよなく愛用され、学生にはこの本が一番判りやすいとおっしゃっていた。私が講師になることが決ってから、一度だけ、先生の試験の採点をさせられたことがある。私は正確に採点し報告したところ、先生は困った顔をされ〝君、学生には書き賃と言うものがあるんだよ〟とおっしゃった。

私は、18年間にわたり、先生の御指導を受け、多くの影響を受けた。そして、この書き賃はこの２、３年私もやっと出せるようになった気がする。

（Ｓ科　教官）

井上先生と短大

小笠原　富　雄

「今年の３月は忙しくそのうえ体の調子もくずしていたので短大の卒業式にはとうとう出席できなかったよ」とすまなさそうにおっしゃられた先生、それもそのはず短大専任教官以外で毎春欠かさずに短大の卒業式に出席して下さった方はおいでだったでしょうか。

私は来春の卒業式には再びあのにこやかな笑顔を学生達の前に見せて戴ける事を疑わず心待ちしておりましたのに、此処に想い出の記を認めなければならないとは何とも云い難くたゞたゞ断腸の思いでいっぱいです。

「トン、トン」と軽いノックの音と同時に「井上だがね」と時折り訪問を受けるのですがその回数の半分は出張の多い先生が旅先で短大の卒業生と出会われたその時の感想や会社での活躍振り等吾が事のように詳細に報告して下さるのでした。「君も知っているだろう何年卒の誰々君、良く頑張っているね。会社でも中堅として重宝され又本人も張り切っていたよ。君にも宜しくとのことでね。尚２，３の会社の方から来年は是非短大の卒業生をまわしてくださいと頼まれて来たんだけどね、最近の就職状況はどうかね」と求人先までよく配慮して下さいました。ときには学生の図面を丹念に見られ「短大生は上手に図面を画くね、君達がよくやって呉れるからだね、短大は勉強も大事だがこう云う事が最有意義な事なんだね」とお

誉めの言葉を戴き以後一層やる気を起した次第で先生には心から励まされそして又勤労学生への暖い心遣いと云うものを教えて戴きました。

2年前江田先生の停年退官記念祝賀会が行われたときのこと、閉式の辞とともに一般の出席者は殆ど退席され残ったのは短大専任の教職員と同窓生の方々だけでした。そこで宴席を小じんまりと整え江田先生を囲んでの二次会を開きました。そのとき江田先生としっかり肩を組み着席されたのは井上工学部長でした。その姿はほんとうに楽しそうで短大の内輪の雰囲気にすっかり溶け込まれ不自然さは全然見うけられませんでした。挨拶に立たれた先生、やはり江田先生と共に短大設立に東奔西走されたお一人でした。短大生への愛着の根源此処にあったわけで当時の苦労話等から話が跳み「今後の短大の為私の力で出来る範囲内に於て勢一杯働かさせて貰います」と力強く確約され万場の惜みない拍手をあびておられました。専任以外で短大のため陽になり陰になり心に止めそして力になって下さった数少い中のお一人でした。

思い出10数年前　小春日和りのお昼時に研究室の一隅で会食をしていた時のことでした。梅木（旧岡崎）幸子さんが先生のお弁当のおかずを見て、「先生南瓜の黄味は頭の働きを良くするんだって」となにげなく云われると「あそうか僕はもっと頭がよくなりたいから毎日食べよう」と笑いのうちに素直に受け止められたのでした。それから先生のお弁当に時々一片の南瓜が色どりを添えてあり、「僕は特別に好き嫌いはないよ」とおいしそうに食べて居られた事が一昔を経た今でもありありと思い出されます。常に健康に留意されており、私達も先生は誰よりもタフで丈夫なお体と認識して居りましたのですが……

先生への尊敬と追慕の念は断ち難くも、教えを受けた私達はご在世中に残された数々のご薫育を守り学生の指導にあたるそれがご恩返しの道と考えられます。終りに乱文ながら心から先生のご冥福をお祈りいたします。　（M短　教官）

宝を天に積まれた先生

熊　倉　重　典

井上先生の急逝が神のいかなるみ旨によるものか、私にはいまだに判らない。しかしそれが我々人間の思いを超えた大きな神の愛のみ業によるものであることを信じ、いつか私達も、神のみ心を知り、神に心からの讃美を捧げる時が来ることを信じる。聖書に「今の時の苦しみは、われらの上にあらわれんとする栄光にくらぶるに足らず」（ロマ・8—18）とあるからである。

先生の眼はいつも天に向って澄んでいた。

先生位、学生達を愛して教育された方も少ないと思う。学生一人一人を良く知っておられてよく色々な相談にのられた。先生は精密工学科創設当時の主任教授をやられ第一期生を卒業させられたが、当科を学生、教職員が一体になった大家族として教育に当る科とすることが方針であった。この精神は今も当科の諸行事の中に生きている。教育は学校だけではだめだというお考えから機械系の単科寮を二つも作られた。又学生のクラブ活動も重要な教育の場と考えられ多くのクラブの顧問をされてよく世話をされた。反面大変躾がきびしくて教室でも廊下でも名差しで注意された。

研究を重ねられ冷間転造歯車の権威者になられたが、研究の面でもまことに謙虚で世の為、人の為になる研究でやらなければならないと思う事は何でもやろうと言う信念だった。消雪の研究、盲人タイプライターの研究などがそれである。

学部長になられてからの御仕事はまことに大変だった。真面目な先生はどんな仕事も真剣にやられた。今までに先生位、教官からも事務官からも慕われた学部長は少なかったと思う。今年になって発病されたようだが、その苦しさをこらえて仕事をされ、学部長の職責を完全に果された。そのご無理が病状を悪化させたようである。しかしやらなければならないと信じた事は、命がけでやり通すのが井上先生の信念だった。

先生はこうして本当に「宝を天に積まれ」た。それは「絶対に朽ちることのない宝」である。

思　い　出

近　　久満雄

終戦後しばらくの間は、考えるゆとりもない、落着きのない窮迫した時代であった。私は適当な勤め口もないまゝ学校の図書室で本の整理や貸し出しの手伝いをしておった。

そんな或る日、井上先生が図書室に来られた。先生は、そのしばらく前から学校に勤められていた。私も図書室を手伝うようになり、学校で遠くからお目にかゝってはおったが、つい御挨拶もしないまゝ何とはなしに過しておった。その時、先生とは、どんな話しをしたかはっきりとは覚えていないが、私を覚えておられたこと、今やっている仕事は、専門から離れていること等で、私の事を気に止めていただいていることが、それとなく判って非常に嬉しかった。

井上先生との出合いは、先生の学生時代、私が実習工場で職工見習として働いておった時からである。その頃、学校で初めてグライダー部ができた。昭和15年春である。戦時色が次第に濃くなって、飛行機への関心が深くなった時代である。大柴先生が指導教官で、部員は機械科の学生十数人、その中に井上先生がおられ、私も加わって訓練を受けた。初めは、学校のグランドで基礎訓練をし、後に八幡原飛行場で飛翔訓練をした。その間、数か月ではあったが、小林惟康先生、石田喜助先生も参加されての訓練中、小林先生が失速されそうになったこと、学校のグランドで訓練中、大柴先生が操縦されたグライダーが紡織工場のそばにある桜の木に当ったこと等、今も強く印象に残っている。

その後、数年間、先生とはお会いしていないので、図書室に来られた時、私をどの程度御存知かと思っておったが、御記憶の良さには、感服した。先生には、その後何かと親切にしていただき、私が機械工場に勤め、研究の手ほどきを受け、何とか研究できるようになったのも先生のおかげであった。また碁の手ほどきを受けたのも先生からであった。学問研究だけでなく、人生の師として、よく困った時は先生のところへ行った。先生の側にいると何かほっとした気持になり、兄のような情がそこにただよっていた。

先生には、短大創立当初から機構学、実験工学雑誌会等の講義を担当していただいた、

我々教職員、学生共々、先生の立派な人格に接し、学問、研究の指導を受け、生涯忘れることの出来ない深い感謝の念と、数々のよき思い出が脳裏に深く刻まれている。

『井上先生と運転免許証』

M38　菅　野　幹　男

井上先生が自動車の運転免許証を持っておられたことは、意外に知られていなかったように思う。それも、20年ぐらいも前の話であるから、当然と言えばそれまでかも知れない。当時は、免許証を所有する人は非常に少なく、昨今とは大分事情が異なっていた。実地試験免除の教習所などまだ無かった頃で、誰もが県公安委員会の厳しい試験を受けなければならなかった頃である。試験に合格することは、容易ならざる時代であった。

先生は、私が学生の頃に、自動車部の顧問をなされたことがある。その頃、部には5名（記憶に間違いがなければ）の教職員部員がおられた、井上先生もその一人でしたから、先生は、顧問であると同時に一部員でもあられたことになる。先生の講座（当時のM4講座）には、岡崎さんという若い女性がおられ、その方も部員でした。先生と岡崎さんが、早朝6時から7時半頃までの時間に運転練習を始められることになった。昭和36年の初夏の頃である。練習は、厳格な部の不文律によって、有免者（免許証所持者）の同乗なしに勝手に

行うことは許されない習わしとなっていた。そこで、M科3年の部員が中心となり、数名で輪番にその役を受けもつこととなった。夏休みもあって、本格的な練習は9月以降であったと思う。秋も深まると朝の気温が下るため、クラシック車（練習車）は言うことを聞いてくれなくなる。仲々始動しないので、先生自らもクランク棒廻しに汗を流され、ともに往生したものである。岡崎さんの方が一足先に免許証を手にされた。先生が免許を取得されたのは、暮も間近い頃でした。本館内の旧学生係前の廊下で先生にお会いした際に、先生の独特な、柔和な笑顔で、合格なされたことを話して下さった。そのときの場面は今でもはっきりと覚えている。お2人とも1回の受験で合格なされたのは、当時の部にとっては快挙であった。

ある秋晴れの日に、鳩峰高原へ紅葉狩りに出掛けられたことがあった。岡崎さんの初乗りを兼ねた講座のリクレーションである。一行のメンバーは、石田先生（ご退官なされました）、井上先生、小笠原先生（現、短大M科）と岡崎さん、それに先輩の甘粕さん（M37年卒）と私の6名であった。某卒業生よりご寄贈いただいた、年式は古いが勇壮たる外車〝ポンティアック〟に乗って、悠然と高畠街道を走った。高畠の町外れの、ある農家の庭先でリンゴを買い求め、曲りくねった悪路の坂道を高原目差して車で登った。眼下に開けた真赤な紅葉は、秋晴れの紺碧の空に映えて美しく、鮮やかだったこと言葉にも尽し難く、約20年経過した今も強烈な印象として刻まれている。新鮮なりんごを齧りながら、先生方とともに眺めた、あの光景と感激は、学生時代の貴重な思い出の1ページとして、永遠に私の記憶から消え去ることはないでしょう。

先生についての思い出は、私の場合、自動車に纏わることで始まり、育ってきた。2年ほど前のある日、たまたま、先生との会話の中で自動車のことが話題になった。運転歴をお尋ねしましたら、〝あの後、2～3度ぐらいはハンドルを握ったことがあったかな〟と笑って答えられた。先生が免許を取得なされた真意とその動機は、果して何であったのだろうか？必要性や単なる興味とか趣味という理由では無かったように、私には思われる。先生は常に学生や若者の中に存在していた。若者の言に耳を傾け、ともに語り、そして理解を示された。その辺りに、先生のお人柄と教育哲学の一端を窺い知ることができるような気がする。そして、自動車部の顧問をお引受けなされたことこそ、先生の動機であったように思えてならない。

先生のご冥福をお祈りいたします。

井上先生を偲んで

高　橋　　寛

先日、先生の御長男の一郎さんにお会いした時「ようやく父の夢を見ることができるようになりました」と語っておられた。突然の死を迎え、ただ動転した日々のあれこれ、先生から受けた御恩誼の数々を私もようやく回想できるようになった。

井上先生なら、気持の中では分っていて下さるに違いないという甘えから、先生には随分楯ついて来た。その度に先生は困ったような顔でツム、と黙しておられた。身を削って学校の為に尽して来られた先生の杖とならずに鞭となって来た自分を慚愧する。

先生の宅によく御邪魔をして碁を打った。私のは喧嘩碁であるが、先生のは殿様碁であった。お互いに相手の棋風を真似ようとしていたが、結局は身につかなかったように思う。4年前私の米国留学の時、先生に碁盤と歎異抄を送って戴いた碁盤は一人暮しの無聊を紛らすのに随分役立たせて貰った。週一回のパークレィの碁会で外人に負けた口惜しさから、毎晩詰碁の勉強をしていた。

歎異抄の方は、先生が何故これを送って下さったか分らなかった。ともかく寝る前、毎晩一節づつ音読してみたが、読了後も結局先生は何を語ろ

うとしたのか私には伝わらなかった。帰国したらお聞きするつもりでいたが、学部長の激務の最中で、ついに手遅れになってしまった。

後で奥様に聞いたら歎異抄は先生の大好きな本であったとのこと。改めて読んで見て「我が心の良くて殺さぬにあらず。又害せじと思うとも百人千人を殺すこともあるべしと……」の部分かなと考えたりしているが、私の宿題としていづれ答案をもって先生の所へ行きたい。

先生の入院中　碁の雑誌をお見舞に持参したがさびしそうに「元気がでなくてね」とおっしゃってやむを得ずそのまゝ持ち帰ってしまった時は悲しかった。私はこれから誰に殿様碁を習えばよいのか。

井上先生を偲ぶ

平野芳太郎

雑然とした昼でも薄暗い東大数理の研究で、はじめて井上先生とお会いしたのは18年前の初秋である。

太く一文字に張った濃い眉毛、柔和な眼差し、そして特徴のある声音でゆっくりと一語一語噛みしめるように話される、豊かな先生のお姿が、もう不透明な霧の中に沈んでしまった記憶に、奇妙に鮮明に浮上ってくる。おだやかだが、がっちりと威厳のある童顔、また生れたままを思わせる笑顔、これはお亡くなりになるまで先生のもので、終生変りませんでした。ある意味では仏の顔であり、姿格好であったかもしれません。

頑張りやで努力家で人の面倒見もよかった、先生は頼まれゝればいやと断れない。どんな辛いことでも、言葉にも態度にもあらわさなかったし、怒った顔も思い出せません。そして周囲の人々に大きな愛情をそゝぐのが常でした。また先生は優等生にありがちな隙のない、かたぐるしく面白味のないタイプの人間ではなかったと思いますが、最後までストイックに生きられました。病が悪化していたのに激務の学部長職を持ち前のストイックさで、任期満了まで、無理を重ねて果たされました。周りのものには悲愴と映じたことも、先生には苦痛でなかったのかも知れません。

それは病でやつれていたにもかゝわらず、あの笑顔があったからです。これをさゝえた先生の底には克己心があった。しかも私など到底及ぶところでないが、その克己心も理路整然としていた。しかし、これが病気を勢いづかせ先生の死を早めたと、私の勝手な解釈である。

もう少しチャランポランとしていても良かったのだ（先生苦笑しておられますか？）そうであってほしかったと思うがいまさら愚痴である。

今でも先生の教授室の前を通ると、あの豊かな御体に笑顔をみせながら「やー、どうですか？」と問いかけてくるような気がする。それは私の記憶の中にいつまでも身近かに生きておられる先生の仏の姿である。　　合　掌

松川河原の舞い

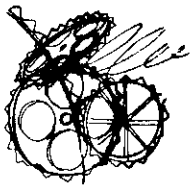
M38　三　留　謙　一

もう15年ぐらい前の秋であった。たしかM系のいも煮会のときであったと思う。鉄橋より少し上流の方で、すゝきが一面に拡がっている河原であった。　吾妻が近く、大きく迫り、朝日連峰が遠くにかすみ、雲はどこまでも高く、周囲に紅葉にそまり、錦秋の秋はたけなわであった。

しばらくの間いも煮を味わい、食べたり飲んだり美しい淑女たちに見とれたり、回りの人と話し合ったりしてふと目を上げると、井上先生が踊っておられた。舞のようにも見えた。遠い昔の農民の踊りのようでもあった。リズミカルにはやくそしてゆっくり、高く低く、回りのすすきの動きにとけこんでいた。

雲の流れに木々のこずえのさゝやきに、ひらひらと舞い散る落葉の動きに、さらさらと流れる松川のせせらぎの音に、そしてどっしりとした吾妻の

中によく調和している舞いであった。自然の中に息づいている踊りであった。
その後多くの人に出会ったが、このように自然の中で踊り舞いうる人にはまだお会いしていない。自然を愛し、山河に親しんでおられた人格のゆえであろう。いまでも絵のようにあざやかに目に映っている光景である。



「井上先生から学んだこと」

渡　辺　克　巳

先生は私達精密工学科第一期生の担任であった。最初に先生を拝見したのは工学部での入学式の後の系別ガイダンスにおいて、当時の機械工学科主任教授の石田先生から「精密工学科の面倒を見てくれる井上助教授です」と紹介を受けた時である。それから二十年経った今日でも講義、実験、製図および学科行事を通して先生から学んだ事は数多く、私の心の中に生き続けている。
しかし、私をより強く感化したのは、卒業後同学科に助手そして講師として勤務する際に、先生に身近に接して学び得た実践哲学である。

一言で述べるならば、先生は言葉少なに物を語る大樹であった。それもまっ直ぐに高くそびえる杉や松というよりも、見る方向毎に種々の趣を与えてくれる枝振りの逞しい欅のような大樹であった。

その一つの枝から私は機械製作の極意である組立て精度の重要性およびその迅速検定について学んだ。すなわち先生の言葉によれば「手で回して回らない機械はモータで回してもだめですよ」ということである。この言葉は、機械工作段階で各部品の精度が実現されても、組立段階でそれらの相対位置関係、特に平行度および直角度が各部品の精度と同程度に保たれない場合には、精密な機械であればあるほど、軸と穴および滑り子と摺動面等の可道部がかしまり、運転が不可能になる。これは、ともすれば機械の入力軸を強力なモータで駆動し、馴し運転することによりスムーズに運動する機械が実現されるだろうと思いがちであるが、それは正道でないことを教えている。
実際に多少の無理を覚悟で運転すれば機械は動くだろうが、特定の部品に弾性変形が生じ所要の精度が維持できなくなる。
ここ数年来、私の研究室では機械工場の協力を得て、0.05～0.02ミリメートル程度の精度を目標に各種の実験装置を製作しているが、設計段階で直交する三軸方向の基準面を設定しない限り、再現性の高い機械は得られないことが分った。逆にこの原則に忠実であれば、先生の教訓に合致した機械、すなわち「組立てた時に手で回せる機械」が実現し得ることを知った。このことは実社会では当然の事なのであろうが、現場経験の無かった私には勤めて十数年目にして初めて会得したことであり、機械の設計、製作に携わる学生に末長く教えてゆきたいと思っている。

もう一つの枝からは、「勉強以外のことで学生と接触する機会を大切にすべきである」ということを学んだ。これは、自分の仕事が忙しくなればなるほど学生と係わることを煩わしく思いがちであるが（私だけかもしれないが）、現在までに知ったこと、体験したこと、感じたことを述べて相談相手になり得る人間に生長すべきことを主張している、さらに年をとればとるほど世代観の相違から学生諸氏と話が合わなくなり、ともすれば自分の考えを一方的に押し付けがちであるが、真に大切な事は今も昔も変らないことを基調に対等の立場で話し合い、討論することも推奨している。

最近、ある新聞の論壇にも記載されていたが、「若い人は理想に対して燃えるような情熱を持ちなさい」という言葉は先生の言葉でもあった。
この言葉は先の言葉と共に私の脳裏に今でも鮮明に焼き付いている教えであり、今後とも学生に伝えて行きたいと思っている。

「自己に忠実であれ」

近　野　　誠

井上和夫先生のもとで過ごした16年間を省みますと、先生のご教示の根本が「自己に忠実であれ」という言葉で表わせるような気がいたします。この言葉は「自分にわがままであれ」と言うのでは決してなく、つらくとも、また人のいやがる事でも、自分でやらねばと思ったら、努力し、苦しさに耐えても最後までやりとげねばならない。人間生きていくには、いろいろな壁にぶつかる。その壁を避けることなく、努力し迷いながらでも打破していくことができる人が、強い人であり、「自己に忠実」な人なのではないのか、とのお教えであったのではと改めて自分に問いかけております。

フリーチェの言葉に、「人生は学校である。そこでは、幸福より不幸の方がよい教師である」がありますが、余りに身近にいて先生のありがたみを意識していなかった私に、この言葉が現実となって知らされようとは思いもよりませんでした。何かが起って自己を省みるということはあるにしても、先生のお考え、お気持をもっともっと理解し、努力すべきであったのではという反省は、私にとって大きな試練でもあると痛感いたしております

また、先生の持論でありました「真の知識は経験から生まれる」も私にとって貴重なお教えでした。

数多い先生のお教えを、ひとつひとつ大切に守り、先生が愛した工学部そして精密工学科の一助となるべく頑張らねばと肝に命じている昨今です。

先生ごくろうさまでした。本当にありがとうございました。

井上和夫先生のご冥福を、心からお祈り申しあげます。

井上和夫先生を偲んで

大学院　鈴　木　登志雄

学部、大学院を通じてこの米沢での五年間をふりかえりますと、井上先生のことがいろいろと思い出されます。

私がはじめて先生と直にお話したのは、二年生の終り、三月の休みに入って間もなくの頃でした。先生はその時、水力学の授業を担当しておられてその試験の不合格者に対して一人一人面接されたわけです。それも試験のことだけにとどまらず人生とか、そういったたくさんのことを話して下さったのを今でも覚えています。

試験の不合格というと、追試験ぐらいしか頭に浮かばない我々学生にとって何か非常に温かいものを感じたことも事実です。

そんなこともあってほんとうに親しみやすい先生というのが私の井上先生に対する第一印象でした。残念ながら私が井上先生の講座に入った時に、先生は工学部長の席についておられて直にお話する機会が極端に限られてしまいました。それでも先生は忙しい時間を割いて実験室などを覗いて下さいました。そして私たちの気づかない細かいところまでも常に見ていて下さったようです。

また、授業や研究を離れたところでは、花見や芋煮会などの席で先生が率先して歌を歌われるなどして場を盛り上げて下さったことも印象的です。そして米沢工専時代の古いものを私たち後輩に伝えて下さったのも先生だけのような気がします。

限られた紙面では言い尽くすことができないのですが、どれ一つをとってみても、先生の人間性の豊かさといったようなものが、若輩の私にもよくわかりました。そんなすばらしい先生を失ってしまったことがほんとうに残念でなりません。

御同朋御同行

石　田　喜　助

井上さんと一緒に旅行している。「時間がないから、急ごうよ」というと、彼は「乗り遅れたって、次の列車がありますよ」と悠然としている。そういわれると、こちらも、何も急ぐことはないという気になる。そのくせ細いことによく気がつく。「先生、きょうは結婚記念日でしょう。もう、お帰りになったら」　当の本人が忘れてしまっていることを思い出させてくれる。泰然と構えて碁を打つかと思えば、緊張で破裂しそうな歌留多会で優勝する。彼には、そういう二面があった。

彼は歯車の転造を、初めて実用化した優れた技術者であるが、同時に形而上の問題についても深い関心をもっていた。大体、技術というものは放っておけば無限に発展するもので、社会に大きな益をもたらすが、付随的に大害も持込むものである。現状のまゝでは、自然は破壊され、人類の生存は覚束なくなるかも知れない。これを防ぐ方法は唯一つ、人は謙虚に創造主の声を聞くことである。彼は、これを、聖書の箴言の一節「神を恐れることは、知識のはじめである」をもって、後進の若い人たちに警告した。

彼は中国の古典、特に論語と孟子に親しんでいた。孟子の三楽は、彼の三楽でもあったが、その中でも「天下の英才を得て、これを教育すること」を光栄ある自己の天職と考えていた。周知のように、孟子は性善説の立場にいた哲学者であるが、彼もまた、同じ立場をとっていたとしか考えられない。彼は人を信じ、人によく親切を尽くした。

彼が亡くなった日の午前である。　わたしは彼を訪ね、奥さんを交じえた三人で、約一時間ほど雑談した。その折、キリスト教の永遠の生命ということに関連して、話は論語の「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なり」にまでおよんだ。そして、その日の夕方、彼の死がつたえられた。

彼との四十一年にわたった地上での交わりは終った。わたしにとって、彼は門下生であり、後輩であるのだが、近年、彼の心を強く引きつけていた親鸞の言葉を借りていえば、まさしく彼は、わたしの御同朋御同行であった。

（山形大学　名誉教授）

〝和夫先生を偲んで〟

M29　伊　藤　敏　行

齢も五十に手が届くようになると思いがけない出来事に逢遇することは稀ではない。
突然に降って湧いた井上先生の不幸な出来事は、そんな我々にとっても大きな衝撃であった。
朝の食卓で、その不幸を知らせる朝刊の活字を幾度も幾度も読み直しても、なお納得しうるものではなかった。 同じ思いは我々M29の仲間、皆にあったらしい。 出社直後、坂下、平賀、高橋、その他の仲間からの電話が相次いだ。すべてなつかしい井上先生の 時代の同級である。
皆、〝なんとしても信じられない〟と言った。
私自身はよく米沢方面に出かける。その度に暇を作っては先生の研究室に伺うようにつとめていた。54年の暮には、高橋伸先生や同級の岸に言われるまま身の不遜も省みず母校に於いて〝歯車の講演〟をさせていたゞいた。恩師井上和夫先生、言わば〝歯車の頂点〟に立たれる権威者を前にして、如何に私の専門の仕事であるとは言え乏しい経験と知識をさらけ出すことは極めて度胸を要することであった。そんな私の気持を察せられてか先生は、「今日は君の話をゆっくり聞かせてもらうよ」とあたかも26年前の卒業研究発表の時と全く同じことを言って私の気持をほぐしてくださった。
こんなことがあってまだ9ヶ月足らずで井上先生が、「この世を去られてしまった」等とは到底考えられることではなかった。
我々仲間が卒業した昭和29年と言えば朝鮮動乱が結末をつげ一挙に不況のドン底に投げこまれた時代で、私共卒業予定者の求職活動で、井上先生を中心に諸先生が身心を擦り減らして居られたこと

を私共はよく覚えています。我々29年組が今日あるは皆井上先生のお陰と信じている筈です。我々は集まるとよく当時の機械工学科の先生の思い出話に華を咲かせますが、〝和夫先生は……〟と「名前」で出てくることを井上先生は知って居られたかどうか、今ではお尋ねするよすがもないが……。当時の我々にとっては兄貴のような存在であった訳である。

私は和夫先生と我々仲間が撮った写真を何枚か所持している。そのどれもがやさしい目で微笑んで居られるが太い眉が示す凛とした気品は先生の意志の強固さを示すものとして抜き難いものがあったことを今以って忘れることが出来ない。その後幾度お会いしても髪の白さは増しても、その若さはいささかも変る御様子が見られなかったことに一驚し、その都度自分の励ましとして来た。

私の在学時代、ひょっこりと私の里の蓬屋に立寄られ、今は亡き母を一驚させ、囲炉裏のはたで粗茶をすゝられ乍ら世間話をして帰えられたり、時が移ってからも突然、「これから君の会社に行ってみるよ」と現われたり、少しく興に乗って「先生一緒に」と誘えば、「そもそも高工の機械科は……」と「ばんから踊り」を踊り出したり、私はその都度幾度か先生のヒューマニズムと温かい血の流れを感じたものである。しかし、その和夫先生は今はもう遠い世界の人となってしまわれた。

教え子を愛し、歯車を愛し、母校を愛し、米沢の地をこよなく愛し続けた和夫先生は今彼岸の地で何を考えられ、何を思って居られるのだろうか。

和夫先生はきっと「君、僕はまた歯車の転造の研究を始めたよ、きっといゝ研究が出来そうだよ」と言ってくれるような気がしてならない。

歯車の加工技術の革新に大きな足跡を残された先生を失ない、今あらためて先生の偉大さをかみしめている次第である。

謹しんで　井上和夫先生の御冥福をお祈り致し追悼の記と致します。

（日本ギア工業 歯車精機事業部 製造部長）

井上先生のこと

梅木幸子

大風が吹いて学校前の一の宮の大木が倒れたことがありました。先生は「家内が1人で家が心配だから一寸家に行ってくるよ」とおっしゃって戻られました。多分私が就職した年だったと思うから昭和32年の秋だったのでしょう。

来年の3月になったら『高専の卒業式に来たついでに』とか言ってニコニコして私の部屋にいらっしゃるような気がいたします。いつもそうでした。御出張のついでに卒業生のどなたかをお訪ねしては、石田先生はじめ科の皆んなに「○○さんは元気でやっていましたよ」と御報告されるのでした。大勢の卒業生なのに実によく一人一人のことを覚えていらっしゃいました。御家族ばかりでなく、私にも、学生にも、卒業生にもやさしいお方でした。きっと先生を御存知の方はどなたもそうお感じになられたことでしょう。

高校を出たばかりのときに、こんなに良い先生にめぐり会えて、私は本当に倖せ者でした。農学部に移ってからもいろいろ御心配いただきお世話になっておりましたから、折にふれ想い出すことが多く、改めて何を書いたらよいのやら迷うばかりです。

先生からは仕事に必要なことはもちろん、その他のことも沢山教わりました。引込思案の私を手とり足とりで教えてもらったお蔭で現在も直接役立っていることが少なくありません。先生の手ほどきがなかったら絶対にやれなかったものに運転や麻雀があります。ダンスやかるたもかなりすゝめられたのですが手が出せず見とれるばかりで過ぎてしまいました。

私はとても仕事が遅い上に、気に入らないとやり直しをするため、一枚のグラフを書き上げるのにも他の人の3倍位かゝり、つい残ってしまうことがあったのですが、そんなときでも「まだ出来ないか」というようなことは一度もおっしゃられ

たことがなく、かえって「あなたが一生懸命やってくれるのは嬉しいが、もし身体でもこわしたら代ってやることが出来ないのだから、あまり無理をしないでくれ」と笑いながらおっしゃるのでした。未だ電気製品の普及しない頃に私のために足温器を買って下さいましたし、国際見本市に連れていっていただいて、初めてのビールをグイグイ飲んでふらふらになり先生に御心配をおかけしたこと、書いていると次から次と湧いてきて、あのこと、このことどこまでも書き続けられそうな気がして参ります。どの1つをとっても先生のお人柄が偲ばれて懐しく、それに対してお返しすることのなかった自分が情なく、恥しく、悔まれてなりません。どうぞお許し下さいね。これからも、いつまでも私の心の中に生きていて下さることでしょう。御冥福をお祈りいたします。

（山形大学　農学部）

思い出すまま

酒　井　高　男

井上兄が病をえて入院されたことは聞いていたが、見舞う時を持つ間もなく天国に送ることとなった。無念という他はない。

井上兄とは、昭和14年4月米沢高等工業学校に入学して以来の親友として、41年の長きにわたり交友をつづけて来た。

兄は、白楊寮の丁度向いの部屋にいて、机に向うときはいつも正座をしていた。勉強家ではあったが、決してがり勉家ではなかった。

友との交わりを大切にし、わるふざけすることはなく、常に中庸をえた学生生活をつづけていた。卒業研究では石田喜助先生のご指導のもとに一緒に歯車の研究に打込んだ。その縁もあって、東北大学に進学するときも一緒で、ともに航空学科に入学した。

昭和18年になると、戦局は次第に日本にとって不利になって来た。私たちは銃後にある学徒のあるべき姿についてよく議論した。そして、恩師成瀬政男先生の創設された航空寮に入り、共に研鑽に励む決心をし、彼にも入寮してもらうことになった。

私たちの生活は、起床するとまず寮の掃除から始めることを日課とした。彼は率先して便所の掃除を引き受けた。　彼は誰もが嫌がる仕事であっても、それが必要であるときには、率先してその困難を引き受けるところがあったように思う。

いま彼を天国に送って静かに考えると、彼のこうした美点を、私たちは好都合とばかりに利用しそれに甘えていたのではないかと反省させられる。

彼を失ったいま、悲しみと同時に私の胸中に去来するのは、悔いにも似たこの思いである。彼と苦しみを共にし、彼の重荷を共に担ってあげられなかったことに対する悔いである。幸い彼は一人のクリスチャンとしてこの世を去った。すべての善悪を超えて、彼はいま主の御手に抱かれて全き平安のうちにあると信ずる。

（東北大学 工学部教授）

井上先生の思い出

S 46　菅　原　健　二

井上先生は真面目で、思いやりの深い先生でした。私にとって先生は研究者としてはもちろんの事、人生の大先輩としてかけがえのないまさしく最高の恩師でありました。

先生は、4年の卒業研究期間中はもちろんの事、その前後にあっても多忙の身をさいて親しく我々に接して下さいました。例えば、工機寮の新入寮生歓迎会や寮祭にも良く出かけていただき、卒研室にも良く顔を出しアットホームな雰囲気づくりに努めていただき、また卒業後学生諸君の就職依頼へ伺がった時は先生みずから親しくお話しいただいたり、まさに一つ一つを数え上げたらきりがありません。それらの中で、2，3想い出深い事を記してみたいと思います。

先生は慎重かつ大胆でありました。何度か御指

導いただいた囲碁と、卒研室で蔵王へ行ったスキー合宿が特に印象深い。先生は仲々に慎重な作戦で打ち進め、また滑り始めるが、とあるターニング・ポイントへ来ると大胆に石を取りにも来るし、どんな急斜面も果敢に乗り切ってしまうのである。この事は長年続けておられた先生の〝転造歯車の研究〟にも相通じると信じられる。

先生はまた不言実行の方でした。先生は雄弁とか多芸とか言う方ではありませんでした。しかし毎年〝井上研〟は人気があり、まさにその点に先生の学生に対する思いやりが隠されていたと思います。私事で恐縮するが、トヨタへの就職の時直筆の推薦文を書いていただき、卒業の時は今も座右の書としている抜山先生著の〝研究者のノート〟を記念にいただき、また結婚式には御多忙中わざわざ名古屋までおいでいただき、本当に公私共大変お世話になりました。

筆に尽くせない先生の思い出と先生への感謝の意を表し、先生の御冥福をお祈り申し上げます。

（トヨタ自動車工業）

就職状況一覧　（昭和55年3月卒）

【機械工学科】

阿部新次	松村製作所
阿部真也	新潟交通
赤間隆一	通研電気
東義則	日本信号
有馬利之	関東精器
安斎道雄	進学（山形大・大学院）
安藤富昭	東北パイオニヤ
五十嵐淳	山形日本電気
伊藤彰悟	三和機械
伊藤司	日東紡績
伊藤充	東芝プラント建設
板垣文則	松村製作所
今井和康	北越製紙
内田信隆	高丘工業
小野寺寿生	ミツヤ送風機
尾形純	山形カシオ計算機
岡芳男	本田技研工業
岡本長久	日立サービスエンジニアリング
奥山和伸	富士通
柿崎哲也	八戸市役所
堅田義郎	東海興業
金子均	進学（山形大・大学院）
河鰭健一	太平工業
佐藤宏	本州製紙
佐藤昌弘	クラリオン
斎藤淳	コンピュータシステム
斎藤裕	福島県庁
坂本亮一	K. K. ビーエスシー
三戸敏博	進学（山形大・大学院）
渋谷寿夫	新菱冷熱工業
菅原忠美	アルプス電気
多田徹	山形県教員
高橋義高	進学（山形大・大学院）
丹野忠義	山形ナショナル機器
二宮和彦	小松造機
二宮啓次	山形県工業技術センター
林宏一	住友エンバイロテックス
広野洋一	進学（山形大・大学院）
藤田潤	日産自動車
増子雄一	第一工業
松下昌幸	日清紡績
武者亨	進学（山形大・大学院）
横山勝正	日立電子エンジニアリング
吉田寛	東急建設
我妻政弘	高畠農協
渡部真次	常盤共同火力

菅野新一	バンビ
菊地範夫	進学（山形大・大学院）
北村公一	鷲宮製作所
熊谷和彦	リコー光学
桑原茂	米沢電線
小林尚人	ウルシヤマ金属工業
近藤茂則	
佐々木実	進学（東北大・大学院）
佐藤修一	冷凍技術工業所
渡部宏	パイオニア
張華松	進学（山形大・大学院）
阿部隆	黒崎築炉
沢田秀信	岩手県庁
長尾詩織	小笠原プレシジョンラボラトリー
伸鉢隆次	日本ジーローター
山口茂	
志田義則	大泉工業

【大学院　機械工学専攻】

新井文英	宝工業
落合利昭	東芝エンジニアリング
佐藤康博	東京芝浦電気
桜井隆	日立製作所
田井中毅	井セキサービスセンター
田村重夫	三井造船
高橋正之	宮城県工業技術センター
蜂谷範幸	三菱重工業

【精密工学科】

阿部修	ナイルス部品
阿部伸行	京浜気化器
穴沢広	日産自動車
荒関義之	東北リコー
井上利春	トプコン山形
小河原覚	自営（酒類販売業）
片股博美	古河鉱業
菅野智	進学（山形大・大学院）
菅野弘之	東北沖電気
小林道夫	日本建鉄
小松勝彦	三恵技研工業
小松正樹	東北ゴム
権藤義弘	三菱製紙
佐伯佳貞	須賀川精機
佐藤尚人	明電舎
佐藤政雄	旭光学工業
須貝栄寿	須賀工業
鈴木孝一	キャノン電子
鈴木稔久	進学
鈴木英敏	東京鍛工所
田辺賢治	三菱自動車工業
高田勝義	沖電気工業
高橋敦	天昇電子
高橋和幸	トヨタ自動車工業
高橋敏昭	日野自動車工業
鳥羽利紀	自営（鉄工業）
中島勇夫	日立工機
福村清治	アスモ
堀誠	古河電気工業
正木健	松下電器産業
吉田修	三住商事
吉田正彦	アキタ電子
大石岳春	日立産機エンジニアリング
曽我弘	藤木鉄工所
山田昌弘	石川鉄工
渡辺敏	国鉄（地方）
阿部紳一	高橋工業所
上林弘明	湘南産業
佐藤信	日本ＧＴ

【 大 学 院　精密工学専攻 】

斎藤　晋	東京光学機械	西原　修	富士通
酒井友由	シンガポール日本人学校教員	野内　仁	東北ムネタカ
寺岡達夫	日立電線	久松徳郎	山形工業試験場

【 工業短期大学部　機械工学科 】

安達伸一	アイジー工業KK	佐藤寿幸	KK興和製作所
阿部雅彦	〃	斎藤博文	地方公務員（岩手県）
姉崎秀隆	KK川井山形製作所	椙谷寛広	KKヨジダグループ　KKユーワ
石山　弘	56年千葉県中学教員	杉山清人	KK板屋製作所
稲垣絹一	KK村林総業	富樫　学	
今村文人	KK米沢製作所	二階堂高之	千住金属工業KK
小野寺利光	三浦印刷KK	正木　均	KKミツヤ送風機製作所　仙台営業所
柿崎美智也	石川島芝浦機械KK松本工場	富田幸栄	KK川井山形製作所
川合善広	東輝電気工業KK長井工場	菅原弘記	KK松本金型技研
木村寛実	中外機工KK	高山宏二	KK神保鉄工所
小口　勉	東北広重工業KK	結城秀次	山形消防署
今野達也	KK興和製作所		

【 工業短期大学部　専攻科 】

古賀　勅	KK秋元製作所

≪編　集　後　記≫

突然の井上先生の訃報には、ただ驚くばかりで信じ難いことでありました。　そこで友諒会会長の命により、先生の追悼号を発刊し、かつての先生をしのびたく、学内外の諸氏にご寄稿をお願いいいたしました。ご協力に感謝いたします。

友諒会報　復刊第5号

発行日；昭和56年3月（非売品）

発行責任者；高橋　伸

編集委員；千葉　近
那須康雄
羽賀恵寿
鹿内元治
穂保洋子